

はじめに

本書は、情報マネジメント (IM) に関する基礎的な知識をまとめることを目指して、いろいろな観点から題材を捉えて執筆している。専門分野を問わず、また文系と理工系を問わず、IMについて知識を得たいというあらゆるレベルの学習者に向けた入門書である。

いくつかの章では、IM 教育に関する国際的なカリキュラム (IS2010, CS2013) が何を扱っているのかにも注目している。たとえば、「なぜ、IM という概念が必要なのか?」、「そもそも IM とは何か?」、「情報の管理はどうして必要になったのか?」などの疑問を解決するためである。

読者は IM について、それぞれのイメージを抱いているであろう。そしておそらく、それらのイメージは IM の概念のどこかに接しているであろう。しかし一方で、この書を読みながら、IM の概念を理解することがいかに難しいかにも気づかされるであろう。

各章の構成は、それぞれ独立して展開されている。授業の中でいろいろな話題を抽出して利用することを視野に入れているからである。また、学習順序を定めていない。シラバスの展開に対応して該当する章だけを選ぶことを可能にしているからである。

似たような話題をいくつかの章で扱っている。しかし扱い方は章や節によって異なる。学部や学科、コースカリキュラムなどによって、あるいは学習者の前提知識やスキルレベルによって話題の取り入れ方を変えることを想定しているからである。したがって、科目の位置づけによって学習順序を変え、必要な話題を選んでそれぞれの授業を形成できる。つまり、このテキストの利用の仕方は、他の科目の内容を相互に参照しながら教師がシラバスを作成すれば、IM という科目を新たに設計することも可能なのである。ここでは、本書の目次に対応する 15 週のシラバスを例示しておこう。なお、() 内が関係する章番号である。

- 第 1 週 本講義の位置付けとガイダンス (第 1 章)
- 第 2 週 IM とは何かについての概観 (第 1 章)
- 第 3 週 IM の基礎知識とは何かについての概観 (第 2 章)
- 第 4 週 ファイル管理の基本的な技術に関する概観 (第 3 章)
- 第 5 週 データベース管理システムの機能や技術に関する IM の観点 (第 4 章)
- 第 6 週 出版物に関するシステム・技術と IM の概観 (第 5 章)
- 第 7 週 プロジェクトマネジメントと組織の標準化活動の概観 (第 6 章)
- 第 8 週 情報システム開発と情報の役割・利用方法・管理方法 (第 7 章)

- 第9週 組織活動と情報の役割・利用方法・管理方法（第8章）
- 第10週 人・物・金・情報と企業におけるビジネス活動（第9章）
- 第11週 顧客要求とサービスマネジメントとシステム監査（第10章）
- 第12週 情報技術と情報利活用の進化（第11章）
- 第13週 情報評価の枠組みとは何かについての概観（第12章）
- 第14週 目的によって異なる情報管理・システム管理の仕組み（第13章）
- 第15週 法・倫理・サイバー犯罪とIMの必要性（第14章）

それでは、このシラバスの順序に従って、各章の観点とポイントを簡単に紹介しておこう。第1章と第2章では、データ、情報、知識、および、情報システムに関する基礎的な知識を扱い、IMの何を学ぶのか／学ぶべきかに注目している。第3章ではデータファイル構成と管理システムの技術に関する基礎知識を捉え、第4章ではデータベースシステムの側面から技術とIMの概念に注目している。

第5章からは応用面に注目した観点を重視している。第5章では情報システムの利用現場から、（紙メディアとデジタルメディアとを問わず）図書館や出版物の情報とIMの諸問題を扱っている。そして第6章ではプロジェクトマネジメントに注目してマネジメントの諸概念を扱っている。さらに第7章ではものづくりの観点から情報システム開発とその管理に注目し、第8章では組織の観点からIMを扱っている。

第9章では企業における経営とビジネス活動に注目しながらIMを取り上げ、第10章では運用や保守の観点を取り入れながらシステム監査とサービスマネジメントを扱っている。さらに第11章と第12章では新しい情報時代に注目した話題を取り上げている。第11章ではクラウド時代のIMを扱い、第12章ではメディアドクターに注目して情報評価の枠組みを扱っている。

「目的による情報の特徴と管理」と題した第13章は、行政におけるIM、図書館情報のマネジメント、学術情報のマネジメント、21世紀の公共サービス基盤“電子政府”などの事例が含まれている。これらの話題を演習授業などとリンクすると、さらに発展した授業展開が可能となろう。この章は四つの話題を提供しているが、それぞれの専門家の手でまとめられた実践的な話題を紹介しているので、時間的な余裕があれば、リアルな話題を複数取り上げて、システム管理の仕組みが違うことを理解するとよい。

そして第14章は最終章として、情報社会における法と倫理とIMに注目している。たとえばウイルス対策と管理、倫理とサイバー環境での犯罪、情報セキュリティとマネジメントなど、情報システムの脆弱性とリスク対応などの話題が含まれている。

本書の計画は、数年前に持ち上がっていたが、あまりにも多面的な内容であるために、取り上げ方に関する議論が繰り返された。また、IMの話題の対象が人間であることから、IM教育は大学以前の教育でも取り上げるべき話題であろうとの考えをもつに至っている。

今日では、ネットワーク環境の進化に伴って、情報を利活用する研究者、組織や企業における業務担当者、ものづくりにかかわる技術者などが増えており、IMでは避けて通れない課題で

ある。本書が契機となって、IMに関する議論がますます盛んになることを期待している。

そしてIM教育の内容についても経験的知識のみならず、学問的な知識として時代に左右されないマネジメントの概念として確立されることが重要である。

執筆者と分担

神沼靖子： 第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第6章、第14章

大場みち子： 第7章、第8章、第9章、第10章

山口 琢： 第11章、第12章

川野喜一： 13.1節

小川邦弘： 13.2節

刀川 真： 13.3節

砂田 薫： 13.4節

筆者らは、本書を計画した段階から、しばしば現実社会のさまざまな現場を訪問してきた。そして働いている人々がどのような問題に遭遇し、それを解決しているのかについて、実際に観察させてもらった。協力していただいた関係者との情報交換は、目で見て質問して議論するという繰り返しであったが、それらの内容は本書のいたるところに反映されている。たとえば、情報収集に際しては、(株)図書館流通センター(TRC)の皆様には多くの情報を提供していただいた。それぞれの社会や時代の中でさまざまな実践を通して学ぶことで、さまざまなマネジメントが行われていることについて理解されることを期待している。

本書の出版にあたって、ご支援ご協力いただいた、未来へつなぐデジタルシリーズ編集委員長の白鳥則郎先生、編集委員の水野忠則先生、高橋修先生、岡田謙一先生、編集協力委員の片岡信弘先生、松平和也先生、宗森純先生、村山優子先生、山田園裕先生、吉田幸二先生、ならびに共立出版編集部ほかの皆様に深謝する。

2018年9月

著者一同